



遠藤周作と探偵小説

金 承哲

ミステリー小説や推理小説とも呼ばれる探偵小説は、事件を起こした犯人とその犯人の跡を追う探偵の物語である。実際に探偵として働いた経歴もあるといわれる江戸川乱歩—本名は平井太郎—によれば、探偵小説が面白い作品として成立する条件は、「出発点における不可思議性、中道に於けるサスペンス、結末に意外性」の三要件だという。

冒頭でいきなり乱歩の話をしたのは、カトリック作家と呼ばれる遠藤周作の『沈黙』こそ、立派な探偵小説として読むことができると思うからである。

『沈黙』は、「ローマ教会に一つの報告がもたらされた」という書き出しで始まるが、その「報告」とは、「稀にみる神学的才能に恵まれ、迫害下にも上方地方に潜伏しながら宣教を続けてきた」フェレイラ神父が、長崎で拷問を受け「棄教を誓った」というものであった。それがあまりにも不思議で信じがたいものだったので、「この報告は異教徒のオランダ人や日本人の作ったものか、誤報であろうと考える者が多かった」。

その不思議さの真相を究明するために、ロドリゴ神父は吉次郎を連れて、事件現場の日本に潜入する。まるで名探偵のシャーロック・ホームズが助手のワトソンと一緒に動いたように。そして、フェレイラの跡を追うロドリゴと、そのロドリゴを執拗に追いかける奉行の井上筑後守との間に、サスペンスに満ちた追跡劇が展開される。

ロドリゴは、結局、^{れいご}囹圄の身になり、踏絵の前に立たされる。しかし作品は、読者を意外な結末に導く。なんとロドリゴは、踏絵のキリストから、「踏むがいい」という愛に満ちた声を耳にしたのである。そこで、ロドリゴはようやくわかる。フェレイラを追いかけていた自分は、神を追いかけていたことを。そして、自分もフェレイラも、実は神によって追いかけていたということ。

探偵小説の技法は、『沈黙』以外にも遠藤の多くの作品において駆動力となっている。そこには理由がある。^{わけ}遠藤は、フランス留学の時代から、小説の技法を学ぶためにアメリカやイギリスのハードボイルド小説を耽読していた。その結果、「カトリック小説は、探偵小説の手法を効用する事が出来る」(『作家の日記』)という自覚に至ったのである。

考えてみれば、神が人間を救うドラマとしての聖書は、人間の犯罪から始まる。アダムとエバ、カインとアベルの物語の中で、神は罪の現場に探偵の如くあらわれ、その罪を裁く。また、新約聖書は、誰が何故イエスを殺したのか、イエスは何のために殺されなければならなかったのか、という探偵小説的な問いへの答えでもある。その答えは、罪人の私たちを救うために、というものである。

遠藤は言う。「私の小説も、人生も、やはりミステリー小説です。この場合、ミステリーというのは文字通り人生の神秘というものについて、その意味を探ろうということでミステリー小説になるわけです」。(『自分をどう愛するか<生活編>幸せの求め方』)

探偵小説は、ミステリー小説と同義語であることからわかるように、神の神秘(=ミステリー)を探るために、その神の神秘が隠されている人間の暗い内面に手を入れるのである。そうであれば、探偵小説としての『沈黙』は、自分の中に隠されている神の痕跡を追跡する、私たち一人ひとりの物語である。

「あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじない」。そう告白したのは、あの有名なアウグスティヌスであった。その通り、地上の人間はみな、自分の中に、また世の中に隠されている、神の痕跡を追いかける探偵のような存在ではないだろうか。

(KIM, Seung Chul : 南山宗教文化研究所長・人文学部教授)

あの頃の遠藤周作を訪ねて

はじめに

先号の『カトリコス』に引き続き、この号も前年度に開催したカトリック文庫講座のテーマに合わせて執筆することになった。2017年10月4日に開催したカトリック文庫講座「『母なるもの』のまなざし—遠藤周作の作品を味わうための講座—」では、講師の金承哲先生（南山宗教文化研究所長・人文学部教授）が、「痕跡」と「痛み」をキーワードとして様々な角度から語ってくださり、これまで遠藤文学にほとんど触れたことがなかった私たちにも幾ばくかの関心と興味が芽生えたからである。

一方、多作で関連する出版物も多く、また作家以外の様々な活動でもメディアに取りあげられ、研究者をはじめ多くの人々に語り尽くされた感のある「遠藤周作」や「遠藤文学」を正面から取り上げる勇気はない。そこで身近な接点を探してみたところ、1989年11月4日に、南山大学創立40周年記念行事のひとつとして遠藤周作氏を本学にお招きし、「わたしの考えかた」をテーマとする講演会が開催されたという事実がわかった。遠藤周作氏が本学を訪れた1989年当時、作家は66歳。前年には、戦国三部作の始まりとなる『反逆』の読売新聞紙上での連載が始まり、たびたび愛知県の本曾川周辺を訪れている。また講演会直後の1989年12月、母を捨てた「父」常久が93歳で死去、翌1990年2月には書下ろし長篇小説『河』（のちに『深い河』と改題）の執筆取材のためにインドに渡っている。そして1991年5月、『沈黙』の映画化の件で、アメリカでマーティン・スコセッシ監督と面会。講演のために本学を訪れた頃にまつわる「遠藤周作」を私たちにそれぞれの視点で見つめてみたい。



南山ブレティン No.91 (1990.1.8)

1. 遠藤周作の“引力”とマーティン・スコセッシの想い

2016年、遠藤周作（以下、「遠藤」と記す）の代表作『沈黙』（1966）が発行から50年の時を経て巨匠マーティン・スコセッシによって映画化された。『タクシードライバー』（1976）、『レイジング・ブル』（1980）、『グッドフェローズ』（1990）などの作品で知られ、『最後の誘惑』（1988）で物議を醸した監督である。その彼が、なぜ遠藤の小説、とりわけ『沈黙』に惹かれ、映像で表現することとしたのか、それによって何を訴えようとしているのか、その秘密を探るべくまずは生い立ちから紐解いてみたい。

1) スコセッシの生い立ちと出会い

スコセッシは1942年にイタリア移民の子としてニューヨークに生まれた。痩せて背が低く喘息持ちでもあった彼が、暴力が溢れる日常で怯えながら「弱き者」として生活せねばならなかった苦悩は想像に難くない。そのため屋外で遊ぶ代わりに両親がよく映画を観に連れて行ってくれたという。濃密な家族中心社会で育ったスコセッシであるが、他方両親がカトリック教徒ということもあって身近に教会と信頼できる神父がおり、その憧れの神父のようになるべく神学校に通うこととなった。しかし、女性とロックンロールの誘惑に溺れてわずか1年で退学となる。確かにこれで聖職者への道は挫折することにはなったが、振り返れば彼が映画好きとなるよう両親が環境を整え、その神父との出会いが以降の彼の人生を運命付けたとも言える。くだんの神父は、遠藤にも影響を与えたとされるグレーム・グリーンの小説『権力と栄光』を12歳のスコセッシ少年に貸与し、後にニューヨーク大学の映画学科で薫陶を受けるエリア・カザン監督の映画『波止場』（1954）へ連れて行ったという。続く『エデンの東』（1955）でも「弱き者」が救われることに感銘を受けたスコセッシは、赤狩りの際に仲間を売ったとしてユダと同じ裏切り者の汚名を着せられたカザンの名誉を回復するために奔走している。これが1988年というから、ちょうど『最後の誘惑』において数多のキリスト教徒から批判を浴びていた頃である。そしてこの『最後の誘惑』の聖職者向け試写会にて、とある神父から小説『沈黙』を譲り受けている。つまり、スコセッシは『沈黙』と出会ってから映画化の構想を30年近く温めていたことになる。

2) スコセッシ作品の傾向、嗜好、思想

スコセッシの映画と言えれば何を連想するだろうか。多くの人には激しい暴力描写を想起させるのではなからうか。し

かし、本人にしてみれば現実の経験を単に表現しただけなのかもしれない。しかも暴力を暴力としてのみ描いている訳でもない。神父とマフィアが挨拶を交わす日常に善と悪が混在するかのごとく、一人の人間の中で善悪が「多面的」に存在する、あるいは善の中にも悪の要素が、悪の中にも善の要素が含まれるという「重層性」を見出しているようにも思える。映画『沈黙』で、直視に堪えない拷問を指図する奉行・井上筑後守や狡猾な言葉でロドリゴに棄教させようとする通辞などでさえ、どこか哀しみを湛えているようである。

そして、彼が好きな筋立てとして、登場人物が「精神的／肉体的苦痛を経て新たな人間に生まれ変わる」(笹川慶子)パターンが指摘されている。その前段には当然、自己欲望と外的規制・規範との間の心の葛藤があるはずであり、そのような人物は往々にして「弱者」であろう。映画『沈黙—サイレンス—』においてもこれらのことは如実に表れている。もちろん原作に存在するからなのであろうが、たとえば、原作には無い台詞として、踏み絵を踏んだ後のロドリゴが自分に仕えるキチジローに対して「一緒にいてくれて、ありがとう」と言う場面がある。「赦す」では「赦す／赦される」の上下関係ができてしまうことを見越してなのか、スコセッシは「ありがとう」と言わせているのである。私の信じる神が唯一の神だと言わんばかりに傲慢ともとれる言動をしてきた強き者・ロドリゴが、あれほど蔑んでいた弱者の代表とも言えるキチジローの目線に降りてきて素直な気持ちで吐露するこの台詞には、「(表面的には)信仰を捨てた」後に長い年月の葛藤を経てより信仰を深めたことを示しており、スコセッシ好みの典型かと思われる。

また、モキチとイチゾウが殉教してから舟で五島へ針路をとるロドリゴたちの風景が、彼の作品で多く扱われる古典映画(溝口健二監督『雨月物語』)へのオマージュであることを知り得たり、先に小説『沈黙』を映画化したものの芳しい評価とは言えない篠田正浩の名前がエンドロールのSPECIAL THANKSに挙げられているのを見つけたとき、旧知の仲であり日本ヌーヴェルヴァーグの一人としての敬意を表しただけでない、何かスコセッシの温かいものを私は感じることができた。

3) 遠藤とスコセッシ—響き合う二人

スコセッシの人生をあらためて思い返せば、弱者、劣等生、挫折、…、まるで遠藤そのものである。しかし、弱いだけでは二人が出会うことも惹かれ合うこともないのではなからうか。片や遠藤は、死を意識せざるを得ない病床で人間や人生を深く見つめる経験をし、その経験が回復後に遠藤を長崎へ向かわせ、踏み絵と出会うこととなる。踏まずに拷問にかけられて殉教した強き者だけでなく、踏んだ弱者の気持ちに想いを馳せることとなり、『沈黙』が生まれたのである。そこには戦時中に暴力によって止むを得ず自分の思想や信念を曲げねばならなかった人々を間近に見てきた伏線がある。とはいえ、遠藤が単なる弱者だとは思われない。完成したら死んでもいいとの強い想いで書き上げた『沈黙』であったが、神の沈黙を描いた作品であるとか、「踏むがいい」との表現が「棄教」を促すものであると誤解されたり、フェレイラやロドリゴが「棄教」したのは信仰が浅いからだと批判されることとなった。それでも遠藤は逃げずにたった一人で公開討論会にも応じている。片やスコセッシは、イエスが十字架から降りて普通の人間として暮らす姿を描いた『最後の誘惑』で厳しい批判を受け、業界から一時期冷遇されて望む映画が制作できない状況に置かれた。そうした挫折に沈むことなく『最後の誘惑』の聖職者向け試写会を開催する努力の先に、小説『沈黙』をプレゼントされる幸運に恵まれることとなった。二人は『沈黙』を通して出会うべくして出会ったのではなからうか。

一度「転」んだら(信仰を捨てたら)終わりではなく再度起き上がる方法があること、その人の意思を生かすためには旧約聖書のような「厳格で父性的な神」だけでなく、新約聖書のような「寛容で母性的な神」も必要であることを、お互いに弱者でありその自覚があるからこそ二人の間で共有できていると思われる。

加えて、遠藤には西洋のキリスト教が日本でうまく根付かない実感、そもそも自分自身が母親から押し着せられた経緯がある。小説『沈黙』に「鶏が鳴いた」「長い夜」と書かれてもキリスト教によほど馴染みがなければ日本では字面通りにしか受け取られないが、西洋人で敬虔な信徒であるスコセッシには聖書にまつわる深遠な意味を正しく読み取ることが可能である。西洋人であるからこそ『沈黙』に魅せられ、その意図を正確に汲み取って映画に反映できた側面もあるのではなからうか。さらに日本人の自然観やキリスト教世界観を研究・理解して、遠藤に正対している。遠藤もスコセッシに正対して優しく手を差し伸べているようである。あたかも『沈黙』を共鳴板として二人の魂が響き合うように。

4) スコセッシの想い

端的には、スコセッシは遠藤の『沈黙』に惚れ込んでおり、遠藤が言わんとしたことを誤り無く映像化し、この作品のすばらしさを数多くの人に解ってもらいたいという想いだったのではなからうか。しかし、誤読に誤読を重ねられた作品であるため、スコセッシは相当注意深く調査・研究を続けてきたものと思われる。ブルーレイ&DVDの特典映像には『沈黙』のための部屋ひとつ丸々の資料庫が映し出されている。

遠藤の考えを正確に盛り込んだ例として、たとえば、当初ロドリゴは雄弁であった。唯一の神を日本で伝えようと必死であった。しかし、潜伏するキリシタンがどんどん捕らえられて拷問を受けた果てに殉教する状況に疑問を持ち、神はただ押し黙って何もしてくれないと愚痴る。絶望の中、イエスを踏むことを強要される。内的葛藤の末、「信徒の命を救うため」というただその一点に心が収斂されたとき、はじめて神の声が聞こえる。「踏むがいい」。そのとき、神は沈黙していたのではなく、自分には聞こえていなかっただけ、聞こうとしなかっただけ、自分が沈黙すればするほど神の声が聞

こえることを悟る。それだけではない。断腸の想いで踏んだ後には、かつて自分より下位に捉えていたキチジローはじめ弱者の声がますます聞こえるようになる。転んだことでロドリゴは教会の信仰からは外れたかもしれないが、決して棄教したのではなく、神への信仰は無くなるばかりか、かえって深くなっていく。そして慈悲深い母なる神、寛容な神の必要性や、西洋とまったく同じではないが日本という地では日本なりの信仰のあり方や受け止め方があり、しっかり根を張るのだということ、長い歳月をかけて理解する。遠藤が亡くなった際に遠藤の妻が夫の棺に『沈黙』と『深い河』を納めたように、映画の最後の場面では、ロドリゴの妻が夫の棺に、モキチから託された小さな十字架を納め、そこに神の栄光が輝く。そのような原作に無い場面を含めて、遠藤の意図がスコセッシの映像を通して私たちの胸に迫り、深奥に届くのである。

また、あまり知られていないが、キリスト教が長崎に入って栄えた頃には、神社・仏閣は焼き討ちに遭い、神官・僧侶たちは追放されるなどの史実があるという。つまり、かつてのキリスト教側の不寛容さや暴力が、キリシタンの迫害という新たな暴力を生み出したとも言えよう。暴力は暴力しか生み出さないということ、当初のロドリゴのように自分たちの信じるキリスト教こそ唯一普遍の真理だという布教もある意味「暴力」なのだとすることを、逆説的ながらスコセッシの映像は臨場感を持って私たちに教えてくれている。

先述の特典映像の中でスコセッシは、強者・勝者しか知らない若者などに対する先行き不安や、弱さを拒むのではなく受け入れることの大切さを口にし、物質主義の時代だからこそ「人間の心」と「信仰とは何であるか」とを映画を通じて皆が真剣に考えて欲しいと語っている。スコセッシも遠藤もそれぞれの作品によって種々世を騒がせてきたが、それぞれの方法で自身の信仰を深めて人々にもそれを望み、平和と幸福を希求しただけなのではないだろうか。

(石田 昌久)

2. 木曾川から『深い河』へ

1) 木曾川周辺を歩く

1989年前後の年譜を辿ってみると遠藤は取材でたびたび木曾川周辺を訪れていることがわかる。おそらくは1989年以降、立て続けに執筆した歴史小説の取材旅行のためと思われる。もともと戦国時代の山城や史跡めぐりを好んだようであるが、この頃の遠藤の体調は万全ではなかったにもかかわらず月に一度以上という頻度で取材旅行に出かけている。しかも木曾川沿いの犬山市には十回以上訪れている。『取材日記』(文藝春秋 1990年11月号初出)には戦国時代の地侍や城砦を訪ね歩くことや山城めぐりが二十数年来の趣味となった経緯が記されている。「その場所にたち、ここはどんな人間が生き、どんな人生を送り、どのように戦い、死んだかを考えるといつも胸が痛いほど疼く」。またこの趣味のおかげで「どんな田舎に行っても退屈せずにすむのはこの趣味があるためだ。誰も訪れぬ草茫々の山にしゃがんでいて何時までも飽きない」と述べている。

遠藤の取材に同行した加藤宗哉氏によれば「史跡をたどる周作に労を厭うという感じはなかった。大抵それは立札も記念碑もない、地元の人間ですらそこで何が起きたかを知らない場所だったが、そういう地へ向かうときの周作は突然、人並みの体力を見せた。そして取材の方法も一風かわっていた」。何時間もかけて探し、ようやくたどり着いても、三分と立っていない。もちろんメモも写真もとらず、ざっと眺めるだけで、引きあげていくといった様子。本人はその理由を「丹念に見ると、イメージが湧いてこない。だから一点だけ見る。そして他は見ないようにする」と述べている。

ところがこの時期唯一じっと見つめたのが、『男の一生』の舞台となった木曾川だった。決まって犬山城近くの川原から長い時間、川を眺めたようだ。『男の一生』には「木曾川」が実に百四十か所も登場する。「人々がそれぞれの野望や夢を追って戦い、死んだのに、木曾川だけは黙々と流れている。それが言いようもなく哀切で胸しめつける。」そして「黙々と流れる水を永遠の生命のように凝視している」と結んでこの小説を終えている。

『男の一生』を書き終えて間もなく執筆が開始された書下ろし長編小説『深い河』。そこに描かれたガンジス川もまた人生の喜びも悲しみもそして死さえもすべてを包み込んで悠久の時を流れ続ける永遠の生命の象徴として描かれている。

木曾川を眺めて立つ遠藤の写真がある。この言葉と相まって、かつてこの地を舞台に生きた信長、秀吉、そして彼らを取りまく人々に作家としての思いを巡らしている様子が何となく滲んでいるように見える。

2) 武功夜話について

『男の一生』は尾張国の地侍の家に生まれた前野将右衛門の一生を『武功夜話』をもとに辿った物語である。『武功夜話』とは尾張邦丹波郡前野村(現、愛知県江南市前野)の前野家(現、吉田家)に秘蔵されていた古文書である。戦国期の木曾川筋の土豪・前野一族、特に前野将右衛門の武功について記した家伝書である。長い間蔵の中に眠っていたのが、伊勢湾台風で土蔵の一部が壊れたことによって世に出ることとなった。この家伝書にはこれまで稀薄であった若い日の信長や秀吉の姿、またほとんど不明であった信長の側室吉乃の生涯などが活写されており刊行当時話題となった。

前野将右衛門は秀次事件に連座して切腹させられたが、前野家は断絶したわけではなく帰農して吉田と姓を変え

て現在に至る。前野一族はその多くが切支丹信徒であった。『武功夜話』の発見の際、吉田家の土蔵から、たくさんの切支丹文書もみついている。『武功夜話』編纂の時期は折しも徳川幕府による切支丹弾圧の嵐が吹き荒れた時期でもある。吉田への改姓も切支丹である前野の姓を憚ってのものらしい。

遠藤は寝る間を惜しんで『武功夜話』を何度も読み返したという。彼を惹きつけたのはやはりこの前野一族の多くが切支丹信徒であったことのようなのだ。そこに描かれた戦国武将前野将右衛門の故地、愛知県江南市の旧前野村を訪ねた1990年5月3日。この日の取材旅行は『武功夜話』を読んだ半年前から考えていたとのことである。前日は名古屋に泊まり、朝早く吉田邸を訪問した。吉田邸は「土間の柱も往時のままで黒く太く、通された座敷には御先祖の甲冑と前野家の梅鉢の家紋を染めぬいた小旗が置かれていた」と『取材日記』に記している。また窓の向こう、檜の木と灌木の多い庭に二基の苔むした墓を見つけ質問すると、それはいつか小説に書いてみたいと思っていた前野将右衛門の墓であった。そして「吉田さんがおられなければ私は立ちあがってその苔むした墓に手をあわせ、墓石をなぜまわしたい衝動に駆られた。そうすることでやがて私のモデルとなるこの人物との最初の繋がりをもちたかった。」とある。

旧前野家の玄関前の敷石のひとつに、「當家ハ吉利支丹宗門ニ非ス」という文字が黒く刻まれているのを見つけ、「その文字を見た瞬間、胸が刺されたような痛みを感じた。それは、目の不自由な父にかわって『武功夜話』を筆写した千代という当家の女性が夫や妹たちと切支丹者だったことが発覚し、名古屋の千本松原刑場で殺されたことを知っていたからである。」とも語っている。幕府から睨まれ、彼ら自身も隠れるように生きた前野一族や『男の一生』で主人公に描いた前野将右衛門への共感があつたに違いないと加藤宗也氏は述べている。

3) 歴史小説について

数多くの遠藤の作品の中で歴史小説というジャンルに入る作品群がある。遠藤と南山大学との接点を求めてあれこれ調べているうちに、歴史小説にたどり着いた。先に記したとおり、遠藤はその舞台となった尾張や三河が戦国時代の英雄たちに縁の土地であったために、愛知県に何度も何度も足を運び、取材した。ここでは遠藤自身が歴史小説と銘打った『遠藤周作歴史小説集』についてその概要をまとめてみる。

収録された7つの作品はいずれも新聞や雑誌への連載で、のちに単行本として纏められたものである。第1巻『女の一生 キクの場合』、第2巻『宿敵』、第3巻『反逆』、第4巻『決戦の時』、第5巻『男の一生』、第6巻『王の挽歌』、第7巻『女』である。これらの作品は1980年から1994年にかけて集中的に書かれている。具体的には『女の一生』(1980)に始まり、『宿敵』(1983)、戦国三部作と言われる『反逆』(1988)『決戦の時』(1989)『男の一生』(1990)を立て続けに執筆し、『王の挽歌』(1990)、そして最後の歴史小説となる『女』(1994)を書きあげた。内容を簡単に記しておこう。

『女の一生 キクの場合』:幕末から明治にかけての切支丹迫害事件「浦上四番崩れ」を題材に貧しい農家に生まれたキクの一生が描かれている。

『宿敵』:小西行長と加藤清正を終生の宿敵ととらえ、二人の対立する生き様を描いた。

『反逆』:『武功夜話』によって明らかになった新事実を取り入れて、織田信長を軸に彼に叛心を抱く戦国武将たちを描いた。

『決戦の時』:信長、秀吉、そして木曾川のほとりに住んだ川筋衆一峰須賀小六と前野将右衛門の半生を辿る。

『男の一生』:『決戦の時』とベースを一にしなが、前野将右衛門の一生を辿った物語である。また秀吉が権力を得るに従い、醜い独裁者に変貌してゆく様やこれまでよくわからなかった若き日の信長、そして信長の側室吉乃の生涯が描かれている。

『王の挽歌』:大友宗麟の栄光と滅亡のときを彼の複雑な心の軌跡とともに描く。

『女』:戦国時代から江戸時代にかけて様々な女の生き様を描いた物語。お市や淀の方そして権力の座をめぐる大奥の女たちの争いを描きつつ人の世の無常を描く。

高橋千劔破氏は次のように解説している。「『武功夜話』を根本史料として書かれた『反逆』『決戦の時』『男の一生』は互いに関連し合っており、戦国三部作というべきものとなっている。さらにいうなら、『宿敵』は三部作のいわばプロローグといえる作品で、『王の挽歌』は三部作の番外編、『女』は補遺編とみることができる。また『武功夜話』との出会いが遠藤の創作欲を大いにかきたてそこから数々の歴史小説が生まれた。『女』の冒頭は「歴史小説を書くのは好きだ。それは私の趣味と一致するからである。」で始まる。そして作品の最後は「歴史の好きな私は小説を書くために取材するのではなく、歴史的人物の生涯に好奇心があるから色々な土地を歩きまわった。」「信長も秀吉も家康も見た同じ風景を自分もまた眺めているという快感は、私のような歴史好きには言いようのない喜びである。」と締めくくられている。歴史小説に対する遠藤の熱い想いが率直に語られている箇所である。

評論、小説、戯曲、随筆など様々なジャンルの作品を発表し続けた作家であるが、1989年前後の遠藤の足跡を辿ることで出会えた歴史小説。これを機にじっくりと味わいたいと思う。

(山邊 美津香)

3. 遠藤周作と父

本学の講演会が開催された1989年に父常久が死去している。遠藤が母に執着的とも言える愛情を持っていたことは、母をモデルとして著作に度々登場させていたことでも広く知られている。他方、父とは長く確執があったことは知られているが、著作などに父の影は多くは見られない。あまり知られていない遠藤と父との関係を追っていく。

1) 父との確執の始まり

父との確執は、遠藤の幼年時代、満州の大連で父親に新しい恋人ができ、遠藤が10歳のとき両親が離婚したことに端を発する。父親がこの女性と会うための口実として遠藤を遊びに連れ出したことも、父への憎しみが強くなった原因と言われている。

遠藤は、母が離婚前後にひどく傷ついていた様子を著作の中で何度も描いており、そこには母への愛情と憐れみがあふれている。一方で「強い人」である父が母と自分達兄弟を容赦なく「棄てた」という残酷さが、遠藤の心の中に深く刻まれていたことがわかる。遠藤は結婚した女を捨てるのは、神さまを捨てるのと同じだとも言っていた。父の存在がなければ、惨めなものを決して棄てない「愛の神」についてあれほど深く思い巡らすことができなかつたかもしれない。母を棄てた父への反発は遠藤の強力なエネルギー源だったとも言える。

2) 母のこと

遠藤と父との関係を語る上で母を避けることはできない。母のイメージは、烈しく生きる女の姿であると遠藤は語っているが、作品では父に棄てられた離婚前後の弱者としての母、聖なるものに真摯な母を想起させる描写が多いようである。満州時代、懸命に苦しみに耐えていた母を子供心にも見たくないため、学校の帰り道、ぐずぐずと歩いた遠藤が、かつての母が音楽に傾けていた情熱を今度は信仰生活に注いでいった様子を「冬の朝、まだ凍るような夜あけ、私はしばしば、母の部屋に灯りがついているのをみた。彼女が…ロザリオを指でくりながら祈ったのである。…母は私をつれて、最初の阪急電車に乗り、ミサに出かけていく。誰もいない電車のなかで私はだらしく舟をこいでいた。だが時々、眼をあけると、母の指が、ロザリオを動かしているのが見えた」(『母なるもの』)と描写している。母は芸術に関することは決して妥協せず、自分にも他人にも厳格な人だったと言われている。その厳しさについて、遠藤は「母は非常に勉強家で、一日に四、五時間は絶えず、ヴァイオリンの練習をし、冬の寒い時などヴァイオリンの糸で指が破れ、ピピッと血がとび散ったのを見た」(『ほんとうの自分を求めて』)と書いている。一方、家庭での母はあまり子どもに厳しくなかったが、「ホーリーでない」と叱ることがあった。遠藤は様々な作品で「愛」という言葉を使っているが、母の「ホーリー」という言葉が「愛」という言葉の根っこにはあり、「ホーリーであることが人生でいちばん大切なことだ」という母の教えは遠藤を貫いていた。

また、遠藤は母と優秀な兄に対してコンプレックスを抱いていたようである。思春期の遠藤が学校も教会もさぼって、母の財布から抜き取ったお金で盛り場に行き、母に嘘がばれたときのことを『母なるもの』に描いている。「玄関をあけると、思いがけず、母が、そこに、立っていた。物も言わず、私を見つめている。やがてその顔がゆっくりと歪み、歪んだ頬に、ゆっくりと涙がこぼれた。…その夜、おそくまで、隣室で母はすすり泣いていた。…懸命にその声を聞かまいとしたが、どうしても鼓膜に伝わってくる。私は後悔よりも、その場を切りぬける嘘を考えていた」。善良で強い信念を持った者が崩れていくさま、愛する者を裏切ったにもかかわらず、その場から逃げ出すことしか考えられない自己の弱さを遠藤はこの時強烈に体験した。

3) 母からの信仰継承

両親の離婚後、母に連れられて兄と遠藤は神戸の伯母の家に身を寄せ、のちに西宮夙川のカトリック教会の近くに転居した。この教会で洗礼を受けた母のすすめで、遠藤は12歳のとき兄と共に受洗した。母はヘルツォーク神父の指導の下、厳しい信仰生活を送ったが、遠藤は洗礼が自分の意思ではなく、母の意思によるものであったと悩み続け、日本人の自分にとって「合わない洋服」を着せられ、それを脱げば楽になると思ったが、それもできなかつたと振り返っている。信仰から離れられなかつた理由の一つは母に対する愛着に由来すると遠藤は語っている。

遠藤のカトリック作家としての原点は、熱心で純粋な信仰を持つ母に比べ、キリスト教信仰に疑問を持ちつつも離れられない自分の矛盾にあったとも思われる。また母と自分の信仰に大きな影響を与え学識高く人望の厚かつたヘルツォーク神父が還俗し、神父時代の秘書(当時は既婚女性)と結婚したことも作家人生に大きな影響を与えた。

4) 父との関係

遠藤は父を憎みながらも、経済的な理由から父親と後妻の家に住んでいる時期が長かつた。遠藤は、父が平凡で波瀾のない生活が幸せだとたえず言っていたことから、烈しい気性の母と離婚した理由が分かるような気がしていた。また、父との生活は人生や宗教について何一つ語ることもないのに、物質的にははるかに恵まれていることで、母を裏切っていると毎日感じていた。そのような思いを著書『影法師』の中で「父との生活のなかで僕の母にたいする愛着はますます深まり、かつて母について恨めしく思ったことも懐かしさに変わり、その烈しい性格まで美化されていきました。…そして貴方は少なくともその母の大きな部分でした。…母や貴方のような生き方が、父のような多くの生き方とは別の世界であることを知ったためでもありましょう。自分の生活が、貴方たちのそれに離れば離れるほど、遠ざかれば

遠ざかるほど、僕はいつも貴方たちのことを考え自分を恥ずかしく思いました」と描いている。(注:文中の「貴方」のモデルは前述のヘルツォーク神父)。父との生活で父の凡庸な精神世界に対して失望に似た思いを持ち、そのためにより強く母への愛着と信仰への憧憬が増していったと思われる。

遠藤は父に対し複雑な思いを持っていたが、父は厳しいながらも意外にも愛情深い面も持ち合わせていた。たとえば遠藤は自身が結婚する際、父がキリスト教の結婚式を認めないと言ったときのことを、母子の心理的な関係をどうにかして断ち切りたかったのだらうと語っている。また安岡章太郎氏によると、車を運転していた遠藤が雨の中を父親が傘も差さずに立っているのを見ても停まらずに行ってしまうような態度を取り続けていたが、父は遠藤の評論集『フランスの大学生』を全部先回りして買い占めてくれるような人物であったそうである。

兄の正介は父の愛情深いエピソードを次のように語っている。文学部に入学した遠藤を医学部に入学しなかったと父は勘当したが、兄には「この時局下、いつまでも浪人生活を続けさせることは申しわけないので、医者にするのはあきらめた。…かかる軟弱学問を選ぶとは情けないが、ここは学生数が三人しかいないので入学は確実であり、万策尽きた今となってはやむを得ない。いずれにしてもこのような弟をもったお前にはかわいそうだが、これから先なんとか面倒だけは見てやってくれ」(『遠藤周作の世界』)のような手紙を送っている。遠藤が芥川賞を受賞した折には、父がいちばん狼狽し、老舗の羊かんを持って選考委員の自宅まで挨拶に行ったとも語っている。

長年の遠藤の父に対する憎しみや頑な態度は、父の晩年には順子夫人の執り成しもあり、和らいでいった。家に美味しいお酒が入ると父のところへ持って行くよう順子夫人に言ったり、「親父も孤独な奴だということがわかったよ。自分の女房と、息子たちの子供時代の話ができないのは辛いだろうな」(『夫・遠藤周作を語る』)と入院中の父を見舞うようになったりしていった。しかし、孫をかわいがっていた義母については、父をおじいちゃんと呼んでもいいが義母はおばあちゃんと呼ぶなど家族に強制したりした。そして父の臨終に際しては、母の臨終の時に慌てて飛んでいったけれど間に合わず一人で死なせてしまったという思いがあり、あえて立ち会うのを避けたというエピソードがある。このように、遠藤の父への思いは複雑で、しこりが残っていたようである。

しかし、父が死去した翌年、大友宗麟を描いた歴史小説『王の挽歌』では父と子の葛藤をモチーフとし、結末では子が父の死後、はじめて父に親しみとつかしきを感じ、父をやっと理解する場面で終わっている。ここには母を捨てた父を憎み続けた遠藤が、和解への思いを込めた父への挽歌という意味も託したのではないかと考えられる。大友宗麟を取り上げた理由も、父が晩年に『きりしたん大名 大友宗麟』を自費出版したからではないだろうか。

5)最後に

遠藤と父との関係を見ていくと、必然的に母との関係に触れることとなった。両親の離婚によって母がキリスト教を信仰し、遠藤がカトリック作家として歩んだ過程を表層的ではあるが見ることができた。人はみな多面性を持っていること、人と人との関わりが互いに思わぬ影響を重層的に与えること、強く善良な者が簡単に崩れてしまうことなどを両親やヘルツォーク神父など多くの人を通して見つめてきた遠藤が、批判を受けながらも神と人間関係を独自の視点で捉え、晩年の『沈黙』、『深い河』という作品に集約していったように思う。

(川簾 陽子)

4. 講演で語ったこと

1)わたしの考えかた:南山大学創立40周年記念講演

1989年11月4日、本学の創立40周年記念行事の一環として、遠藤による講演会が開催された。講演「わたしの考えかた」は、『南山プレティン』No.91(1990.1.8)の紙面で、「ユーモアたっぷり、淡々と語りかける遠藤周作氏」とキャプションのある遠藤の写真と、講演の要約からその様子を窺い知ることができる。要約によると、講演では「人間には外、内、自分の知らない自分という三つの顔があり重層的であるということです。」「つまり人間は一つの感情で行為をするわけではなく、色々な心理が重層的に絡みあっているのです。」「マイナスのなかに何かプラスのものはないかを考え、それを引き摺り出すようにした方がよいと思うのです。それを可能にするのが、色々な可能性を考える重層的な考え方だと思うのです。」と、「重層的」という言葉が繰り返されていることがわかる。そして、自身の作品については、「深層心理学でわかった自分の知らない自分の顔をなんとか表現しようと始めたのです。…今の小説は物の価値を二つに分けて考えるという二分法の考え方を捨てようとしているのです。二分法の考え方は確かに明確なのですが、どうしてもそこからこぼれおちてしまうものが出てきます。物事を確実に全体的につかまえるためにはこぼれおちるものがあるといけません。だから二分法よりも重層的な物の考え方のほうがよいのです。」と語っている。

本学における講演の内容は、どうやら遠藤のお得意のネタだったようである。「編集者から見た素顔の遠藤周作」という座談会で、新人物往来社の編集者であった高橋千剣破氏は次のように語っている。「遠藤先生というのは、非常に多面性を持っていらっしゃるでしょう。色々なお顔を。実は遠藤先生の講演のネタの一つが『人間の顔』。人間には七つの顔がある。普通は外づらと内づらと二面ぐらいしか人間はないように見えるけれども、実は内づらでもっと複雑な、外づらでも様々な顔があるという。まさにご自分もそうなんです。その多面性は作品なんかにも、よくあらわれてい

ますね。非常にシリアスな文学作品を書き下ろして書くのも遠藤周作。おちゃらけみたいな面白いものを、こちらで喋り、あちらで書く。それも遠藤周作。いろいろな『遠藤周作』がありました」。七つの顔が、三つに割愛されているが、まさに本学における講演の内容である。

2) 重複的ということ

この頃、遠藤が「重層」や「多重」といった考えかたに傾倒していたことは、いくつものエッセイからわかる。例えば、講演会の2年前、「重層的なもの」(『新潮』84(1), 1987)というエッセイには「京都の深夜には幾重にも層をなした各時代の呼吸がある。それ以上に無数の人間がここで生きたという事実がある。…ものはすべて平面なのではなく重層的なのだと感じだしたのは十年ぐらい前からである。その気持は年齢と共に深くなりつつある。…そういう意味でも小説はもう一度、そのイメージや言語や作中人物が持っている重層性を大事にすべきだ」。また「狐狸庵の軽躁病日記」(『文藝春秋』64(5), 1986)では「ある時期から私は自分のなかの色々なチャンネルを一つだけと限定せず、できるだけ多く廻してやろうと考えはじめた。音ひとつを鳴らして生きるのも立派な生きかただが、二つの音、三つの音を鳴らしたって生きかたとしては楽しいじゃないかと思うに至ったのである。…私は人間とは多重人格であって、たったひとつの人格ではないと思っている。人間とは色々な楽器が同時に音を出すオーケストラであって、ヴァイオリンやフルートの独奏ではないと思っている」。そして「読みたい短篇、書きたい短篇」(『新潮』87(1), 1990)では「一部が全体を暗示する。—これが小説家としての今の私が非常に関心を持つ手法である。…私はいい加減、年齢をとったので、自分の人生をふりかえったり、牛のように反芻しているうちに、平凡な日常の出来事や、偶然の出会いや関係の裏側や奥底に我々の理屈とは別の、我々の思考論理とは別の、全体と繋がるひそかな関係がかくれているのではないかと思うようになってきた。」と書いている。

3) 『深い河』へ

66歳の遠藤は、なぜこの頃、重層・多重といった考え方に傾倒していったのだろうか。対談「『深い河』創作日記を読む」で、三浦朱門氏は「遠藤には無意識の世界に対する憧れのようなものがあつた。だから彼は晩年、精神分析にのめりこむ。意識のうででやっていることなど人間のトータルから見れば何ほどのことか—というのが彼の気持にはある。それ以上に無意識の『なじかは知らねど心わびて』みたいなものが人間としていちばん大きなテーマだ、というところがありました。」と述べている。それに対して河合隼雄氏は「無意識というのも本当に食わせものなんです。しかし自分の意識のはかりしれないところに大きいものが流れているのは、キリスト教でも同じでしょう。」と答えている。そして、三浦氏は「すべての人が大なり小なりそうだと思うけれども、遠藤周作もよく<もう一人の自分>を意識した人だと思います。彼は体力のない人でしたから、みんなと一緒にいなくてもガクンと体力が落ちることがあるんですね。」「結核で胸を手術していますから。私には遠藤の体力が落ちたことがわかりました。そのときから彼は分裂するんです。いままでと同じにはしゃぎ続けている自分—これはみんなのためということもあるけれど—と、さっさと帰って小便をして寝ようという自分と、バツと分かれる。」と、話を続けている。

遠藤の生涯が病氣との同行であったことはよく知られている。27歳で戦後初のフランスへの留学生として日本を離れた後、29歳で咯血。結核と診断され帰国した後しばらくは体調が回復せず、療養生活を送るなかでの母親の突然の死。32歳で『白い人』により第33回芥川賞を受賞するも、37歳で結核の再発。繰り返される肺の手術。三度目の手術では、一度心臓が停止したものの、再び心臓は動き始め、奇跡的に成功する。1980年、57歳頃から体調を崩し、高血圧、糖尿病、肝臓病に苦しみ、以後回復に向かうことなく老いと直面することになる。

1989年11月の講演の頃は、すっきりとしない体調の中、『深い河』の構想が浮かんで消えている頃だったのだろうか。講演直前の1989年9月号の雑誌に掲載された対談で、遠藤は、永遠に向かっていく大きな河—インドのガンジス河の岸に腰かけて、死者が流れているのを夫婦で眺める場面を次作の構想として語っているが、出版された作品の中にそのような箇所は見当たらない。

その後刊行された『深い河』の中には、講演の内容を彷彿とさせる場面が登場する。当時神学生であった大津は、神父になるための口頭試問で「神は色々な顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います」と発言し異端として問題視される。一方、病院では献身的に患者を世話するボランティアとして振る舞いながら、大津を誘惑し捨て、声をかけてきた見知らぬ男についてホテルの部屋に入るような女、美津子も「(神には多くの顔があると大津さんは書いていたけれど)…(わたしにも多くの顔がある)」と呟く。対談集「『深い河』をさぐる」の中で、遠藤は「インドは人の顔が複雑で、なおかつ社会の仕組みも、人の顔を多様にするようにできている。それがわれわれをほっとさせる。だってぼくらはみんな、多様な顔しか持てないんだから。」と語っている。

愛のまねごとではなく、本当の愛を渴望する美津子は、小説の終わりでガンジス河を前に次のように独白する。「でもわたくしは、人間の河のあることを知ったわ。その河の流れる向うに何があるか、まだ知らないけど。でもやっと過去の多くの過ちを通して、自分が何を欲しかったのか、少しだけわかったような気もする」「信じられるのは、それぞれの人が、それぞれの辛さを背負って、深い河で祈っているこの光景です」「その人たちを包んで、河が流れていることです。人

間の河。人間の深い河の悲しみ。そのなかにわたくしもまじっています」

4) 大きな生命

遠藤が1983年、60歳の時に立ち上げた囲碁クラブは、遠藤より碁がヘタというのが入会の条件だったそうである。その「宇宙棋院」の創立メンバーである作家の黒井千次氏は、遠藤の死に際して次のような追悼文を寄せている。「畳の上での対局の場合、遠藤さんは必ず正座して、勝負のつくまで決して膝を崩すことがなかった。飄然とした石の置き方と、端然とした座り方とは極端な対照を示していた。陽気に騒ぐことが好きな遠藤さんの中には、同時に澄んだ水のような静けさがあった。二つの面が夫々別個に存在するというより、むしろ一方が他方を支えとして成立するのに似た関係が見受けられた。…オレからバカなことを取ったら何が残るんだい、とおかしそうに笑われた声が忘れられない。もしそうしたら、澄み返った水だけが残るのではなく、遠藤周作という文学者自身が消えてしまうに違いない、と深く納得した」

遠藤は、囲碁や社交ダンス、素人劇団など文学以外にも色々なチャンネルを持ち、多岐に互る活動に首を突っ込みながら、様々なジャンルの作品の中で、自分の心の葛藤や矛盾を正直にあらわそうとした作家であった。にもかかわらず、書いても書いても、いつまでも自分の知らない自分が存在することの戸惑い。自分ではどうにもならないこととの折り合い。東京新聞に1985年2月から9月まで連載された「自分づくり」には、その葛藤が綿々と綴られている。しかし最後には「むかし世界最古の都市といわれているイスラエルのジェリコを訪れ、発掘跡をのぞいたことがある。そこは暗い穴で、穴のずっと奥に最初の街の層がほのかに見えた。そしてその上に次の街の層が認められ、更にそれらを覆うように三番目の街の跡があった。…その穴をのぞきこみながら人間の内部とそっくりだと思った。いや、人間の心の層のほうももっと数多いかもしれぬ。そして心の内部はもっと深いかもしれぬ。掘りさげても掘りさげても次々と層が発見されるあまりに深いもの—それが人間の心である。だが、掘りさげつくした最後に何かあるだろう。それが小説家としても私は長い間、知りたかった。」と書いている。深層心理学にのめりこみ、<もう一人の自分>、あるいは<本当の自分>を探し続けながら、遠藤は「この年齢になっても私はまだ心の底まで掘りさげつくしてはいないが、しかし自分の鍬の反響が行きつくものを予感させている。それは人間の奥底に地下水としてほとばしり流れるあの大きな生命である。言葉をかえればすべての人間を包みこむ大きな生命である。」と続けている。その後にかかれた小説『深い河』は、遠藤にとって、幾重にも層が重なる深い深い自身の心の奥底にほとばしり流れる大きな生命の河そのものだったに違いない。

(加藤 富美)

おわりに

ここまでカトリック文庫委員4名が本学での遠藤の講演前後のことがらからそれぞれに思いを巡らせ記述してみたのであるが、「重層的」「多面的」「母なる神」「寛容性」「ゆるし」「生命」などのキーワードを並べただけでも、4つの章には通底する“流れ”があるように思われる。また、遠藤に関する資料を読めば読むほど、一様に書くことが困難になる経験をした。これらのことは、遠藤の著作が、そして遠藤自身が、汲めども汲めども尽きない豊かな人間性を秘めた滔々と流れる『深い河』だったからではなからうか。

本学での講演の後、遠藤は1991年9月頃から、書下ろし長篇小説『深い河』の本格的な執筆に入る。1992年9月に初稿を脱稿した直後に「腎臓の数値に異常がある」と医師より連絡があり、作家は「余命の少なきを感じ」、入退院を繰り返しながら、原稿の推敲に取り組むことになる。1993年6月、ついに『深い河』が講談社より刊行される。直前の5月には、「今まで五回にわたって手術を受けたが、今日の手術ほど痛く、辛く、耐えられぬものはなかった」と自身で回想する腹膜透析の手術を受けている。そして、本学での講演から7年後の1996年9月29日、肺炎による呼吸不全にて73歳で死去。遠藤は、生真面目な性格そのままに、人生の最終章に、自身が「本職」と呼んだ「純文学書下ろし長篇」の最終章を書きあげて力尽きたのである。

【引用・参考文献】

- ・マーティン・スコセッシ監督・脚本；遠藤周作原作『沈黙：サイレンス』（プレミアム・エディション）（ブルーレイ&DVD、4枚組）（KADOKAWA：ソニー・ピクチャーズエンタテインメント（発売）、2017）所収 本編映像、特典映像、ブックレット（加藤宗哉、町山智浩、山根道公、ほか）
- ・デイヴィッド・トンプソン、イアン・クリスティ編；宮本高晴訳『スコセッシ・オン・スコセッシ：私はカメラの横で死ぬだろう』（新装増補版）（フィルムアート社、2002）
- ・遠藤周作『沈黙』（新潮文庫）（新潮社、1981）
- ・山根道公『遠藤周作：その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、2005）
- ・遠藤周作『沈黙の声』（青志社、2017）
- ・『『沈黙』小説と映画・特集Ⅱ』山根道公、ほか（風（ブネウマ））102（2017年春）、2017.5・103（2017年冬）、2017.12

- ・「西洋のキリスト教圏における遠藤文学の評価」ヴァン・C・ゲッセル(遠藤周作研究)4, p.29-41, 2011.9
- ・「ニューヨーク時代のスコセッシ映画(一九六三年から一九七〇年まで)」笹川慶子(映画学)12, p.64-76, 1998
- ・「マーティン・スコセッシ論：一九六三年から八二年まで」笹川慶子(演劇学)40, p.100-105, 1999.3
- ・「一つの小説ができるまで-『沈黙』を中心に(講演)」遠藤周作(早稲田文学〔第7次〕)3(3), p.6-15, 1971.3
- ・「スコセッシ、映画の神に問う!『沈黙：サイレンス』」マーティン・スコセッシ(南波克行インタビュー・構成), 塚本晋也, 川崎友理子, 佐藤忠男, ほか(キネマ旬報)1738, p.14-39, 2017.2
- ・「拡大版『映画紹介』『沈黙：SILENCE』：まとも問われるカトリック信仰の「父性」と「母性」の相克：激突する評価を組上に載せれば：『沈黙』を観て考える」八畝収治, 谷口幸紀, 長坂寿久(福音と社会)56(1), p.63-77, 2017.2
- ・遠藤周作文学館企画『遠藤周作と『沈黙』を語る：『沈黙』刊行50年記念国際シンポジウム全記録』(長崎文献社, 2017)
- ・マコトフジムラ著；篠儀直子訳『沈黙と美：遠藤周作・トラウマ・踏絵文化』(晶文社, 2017)
- ・「私はひとつの強烈なイメージを求めていた。それがひとつあれば、それで十分なんだ」マーティン・スコセッシ監督インタビュー；藤原敏史聞き手(映画学)13, p.133-150, 1999
- ・「マーティン・スコセッシの20年(1)・(2)」梅本洋一(早稲田文学〔第8次〕)242, p.44-47, 1996.7・243, p.100-103, 1996.8
- ・金承哲『沈黙への道沈黙からの道：遠藤周作を読む』(かんよう出版, 2018)
- ・遠藤周作『遠藤周作歴史小説集』全7巻(講談社, 1995-1996)
- ・加藤宗哉『遠藤周作』(慶應義塾大学出版会, 2006)p.211, 216-217
- ・「取材日記」遠藤周作(文藝春秋)68(12), p.404-416, 1990.11
- ・長濱拓磨『遠藤周作論：「歴史小説」を視座として』(和泉書院, 2018)
- ・「遠藤周作の歴史小説について」高橋千剣破『母なる神を求めて：遠藤周作の世界展』(アートデイズ, 1999)p.66-69
- ・「母なるもの」遠藤周作『遠藤周作文学全集第八巻 短編小説Ⅲ』(新潮社, 1999)p.38, 44
- ・遠藤周作『ほんとうの私を求めて』(海竜社, 1985)p.144
- ・久保田暁一『日本の作家とキリスト教：二十人の作家の軌跡』(第2版)(朝文社, 2006)
- ・「遠藤周作の秘密(下)」久松健一(明治大学教養論集)408, p.73-103, 2006.3
- ・中村真一郎ほか『遠藤周作の世界(追悼保存版)』(朝日出版社, 1997)p.119
- ・「追悼 遠藤周作と二人の女性」三浦朱門(中央公論)111(14), p.324-331, 1996.12
- ・「影法師」遠藤周作『沈黙：イエスの生涯』(新潮社, 1978)p.202
- ・遠藤順子著；鈴木秀子聞き手『夫・遠藤周作を語る』(文藝春秋, 1997)p.31
- ・遠藤順子『夫の宿題』(PHP研究所, 1998)
- ・遠藤周作『遠藤周作：無駄なものはない』(日本図書センター, 2000)
- ・「遠藤周作「母なるもの」論：「一つの秘密」が切りひらいた世界」笹木美佳(學苑=GAKUEN)831, p.51-60, 2010.1
- ・遠藤周作『心の夜想曲(ノクターン)』(文藝春秋, 1986)
- ・遠藤周作『死について考える：この世界から次の世界へ』(光文社, 1987)
- ・遠藤周作『深い河』(講談社, 1993)
- ・遠藤周作『「深い河」をさぐる』(文春文庫)(文藝春秋, 1997)
- ・「母なる神を求めて：遠藤周作の世界展」(アートデイズ, 1999)
- ・『遠藤周作：総特集：未発表日記五十五歳からの私的創作ノート』(文藝別冊)(河出書房新社, 2003)
- ・遠藤周作『「深い河」創作日記』(講談社文芸文庫)(講談社, 2016)
- ・「狐狸庵の軽躁病日記」(この人の月間日記第21回)遠藤周作(文藝春秋)64(5), p.340-349, 1986.5
- ・「重層的なもの」遠藤周作(新潮)84(1), p.224-231, 1987.1
- ・「昔、老人は神の言葉を話した(「心と体」のハッピー対談, 3)」遠藤周作, 河合隼雄(プレジデント)27(9), p.264-271, 1989.9
- ・「読みたい短篇・書きたい短篇」遠藤周作(新潮)87(1), p.283-287, 1990.1
- ・「一握りの白い石」黒井千次(新潮)93(12), p.192-193, 1996.12

南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.33 2018.11.1発行

<http://office.nanzan-u.ac.jp/library/>

編集・発行：南山大学図書館 カトリック文庫委員会

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone : 052(832)3707 / Fax : 052(833)6986

* 図書館Webページでもご覧いただけます。